



火の柱/Pillar of Fire and Other Plays (1976)/レイ・ブラッドベリ(伊藤典夫訳)/大和書房(3/10刊・¥1,200)

「カレイドスコープ(万華鏡)」、「霧笛」、「火の柱」の三戯曲を収めている。

演劇に関係の深い作家ならば、まず、舞台役者の息子だった、ライバーが思い浮かぶ。ただ、戯曲を書いたという話は聞かない。一方、ブラッドベリは昔から映画の仕事もしており、舞台劇に強い関心を抱いていた。本書は、第三戯曲集にあたる。

「カレイドスコープ」と「霧笛」は、特に説明を要すまい。たとえファンでなくとも、名前ぐらいはご存じだろう。「火の柱」は、未来に甦った一人の死者の物語——いずれも、オリジナルを演劇向きに書き直したものの。もともとのテーマは同じだが、内容は相当変わっている。趣旨は、作者がまえがきで述べたとおりである。SFの視覚効果には、膨大な経費と仕掛けが必要だ——だが、もし舞台でそんなことをすれば、肝心の人間の演技は小さく隠れてしまう。この三編も、最小限の舞台装置で効果が上げられるよう、特に配慮されている。わが国で上演するには、設定やセリフなど、難しい点も多いだろう。しかし、初めて紹介されたブラッドベリの戯曲が、舞台で演じられる時を期待したい。(俊)